

理論と方法

創刊号

Sociological Theory and Methods Vol.1 No.1 1986

特集 社会学における理論と方法

数理社会学の意義と必要性 高坂健次

フォーマライゼーションの可能性 井上 寛

多水準分析の展望 海野道郎

社会の階層構造が与える心理的影響 和田修一

二色点法とSimon-Homansモデル 白倉幸男

社会学における理論の発展のために 盛山和夫

論文

The Yasuda Index of Social Mobility

Atsushi Naoi and Kazimierz Slomczynski

誤答効果と非回答バイアス 宮野 勝

差別的交際ログリニア・モデル分析 鹿又伸夫・小林淳一

集団内差別の発生過程 都築一治

Patterns of Sexual Division of Labor in the Household

Yoshinori Kamo

書評

「現代の社会学者」「自己組織性」「言語ゲームと社会理論」

「構造主義の冒険」「カテゴリーデータのモデル分析」

「地域社会計画と住民自治」「新幹線公害」「緊急時の情報処理」

「現代日本農村社会の変動」

数理社会学会

発売：ハーベスト社

1986-16

書評 165

「自己組織性——社会理論の復権——」今田高俊著. 創文社、1986. 314+15頁. ¥3,500.

橋爪 大三郎

本書をひもとけば誰でも、これこそ待望久しい本格的な理論社会学の書であったと、心に叫ばないわけにはいかない。そして著者が大胆にも、社会学を支えるあらゆる学的伝統を召喚し、査問し、量刑する手並みに、舌を巻かないわけにはいかない。著者の論旨のすべてに賛成できると限らなくても、そう考える理路と必然は、よく伝わってくる。

さまざまな本書の魅力については、別に紹介した（『週刊読書人』1986.9.1）。ここでは、著者が切り拓いた機能主義の新たな可能性をどう評価すべきかについて、私（評者）の見解をのべることにする。

はじめに、議論の位置関係を確認しておこう。著者今田氏は本書で、社会理論の復活をはかる。それはとりもなおさず、彼の自省的機能主義の確立によってなしとげられる。これは、構造-機能主義を内在的に克服する作業からうまれたものだ。

構造-機能主義は最近、どのような境遇におかれていたか？ ‘敬遠’されていた、と著者はいう。パーソンズの「行為の準拠枠」や、社会変動という定式化に原因があるのだが、この学派は、《自省作用を働かせる、有能な行為者》(151)の社会的能力を理論のなかに繰り込むことができていない。そのため、70年代以降の意味学派の台頭と、縦横に渡りあうことができず、感性のひらびを露呈してしまった。いまでは理論社会学の王座からすべり落ちつつあるが、そのことさえ理解できずにいる。これを見かねたからこそ著者は、大胆な機能主義の再定義を提案するのだ。

《外存的批判はもううんざりである》(iv)という著者の主張に、賛成である。だから私共もかねてより、パーソンズに始まり、富永健一・吉田民人・小室直樹らに受け継がれてわが国に定着した構造-機能分析が、矛盾を内蔵しているのではないかと指摘してきた（たとえば、橋爪他 [1984]）。この批判に対して、はっきりした応答を示したのは、これまでのところ著者今田氏のみである。

私共は、構造-機能主義の主張を形式化し、その本質を、機能的な評価（順序尺度）により社会システムの構造ならびに変動を説明する理論、として抽出した。その結果、3つの批判的な論点が浮かびあがったのだ：

- ①機能的な評価による社会の説明と、機能評価（機能要件）が相互連関するという想定（AGI-L図式）とは、両立しない。
- ②複数の機能評価（機能要件）を独立に仮設すると、矛盾をきたす。
- ③機能評価によって構造変動を説明しようとしても、有意義な説明にならない。

①は機能連関分析の考え方を、②は複機能要件論や機能分化の仮説を、③は社会変動の機能的説明を、無効にする。これらは構造-機能分析の中心的ロジックと考えられてきたはずだったが、著者はこうした批判を、十分わきまえている。そして、①～③に抵触しないような、機能主義の新しいヴァージョンを提案している。評者はこれを、私共の批判を積極的に組みとめてくれたものと評価したい。

著者今田氏は、もはや従来の構造-機能分析の枠組みに拘泥しない。おそらくそのことの正当化のために、本書の前半のかなりの部分が、科学方法論を中心とする学説研究と方法論議に充てられ

ている。

本書における著者の主張の注目すべき点を、箇条書きにまとめてみよう：

- (1) まず科学を、これまでより広い範囲に拡大して理解すべきである。科学とはひとくちで言えば、《現象についての認識を存在に接続する理性的手続き》のことだ。それは、仮説／観察／意味をそれぞれ反証／検証／了解に接続する、演繹／帰納／解釈の三つの方法をもった《メソドロジーの三角形》である。科学を導く理性も、この三角形のうえで自在にふるまう《変換理性》に姿をかえる。
 - (2) つぎに社会システムを、自己組織システムと規定すべきである。このシステムは自省する人間主体をメンバーとする。自己組織性は彼ら主体の思考過程に支えられている。全体社会には、相互連関にもとづく創発的特性が宿るかもしれないが、それ以上になにか機能論的実体を想定するいわれはない。
 - (3) 理論は、社会を対象的に説明すればよいというものではない。社会過程のなかに埋めこまれていて、社会を主体的・自省的に構想していく作業である。それは個と全体とを貫く、複合的な螺旋状の円環運動をなすはずである。
- と、大体このようになる。

こうした結論に著者が到達したのは、《社会学において正統を確保しつつつけてきた機能主義——パーソンズの構造—機能主義を含む——の伝統を、一般システム理論における自己組織系の理論によって補強し、フォーマライゼーションを進める》(6) テーマを追究するうちであったという。そこで念のため、著者の主張（自省的機能主義）と構造—機能主義との異同を確認しておけば、

- (i) 著者は、《構造や機能を説明概念として使用》し《構造はルールとしての構造、機能はコントロールとしての機能に限定して用いる》(239)。したがって、機能要件の充足／不充足と構造変動とを結びつけるのはやめる（機能要件の脱目的化）。
- (ii) 《ルールやコントロールと同水準で見合うもう一つの説明概念として、リフレクション（自省）を考え》(242)、意味がコントロールとして機能する《自省的制御》をも考える（機能を意味によって問う）。

この2点が本質的である。

著者は、構造—機能主義の中心命題を、大胆にも切り捨ててしまった。それでも著者が機能主義の看板を掲げるのは、機能要件の概念を温存するからである。《機能主義を継承する立場に立つかぎり、機能要件の発想は廃棄できない》(169)とする著者は、それを、社会システムの課題を实践するために考慮すべき問題、と規定し直す。機能要件は、システムにはじめから具わっているのではなく、ひとびとがそれを問題とするときはじめて存在しはじめるのだ。

さて、著者と同じく《社会学理論の復活》を志す理論家として、われわれは著者の提案をどう受けとめたらよいのか？

本書の積極的主張は、最終章の、複合螺旋運動のモデルに集約されている。これは、著者が看とった、自省的な社会システムの社会過程の実際なのだ。いままでの理論は、構造—機能主義にせよ意味学派にせよ、この螺旋運動の一部分に固執したにすぎない。そう察した著者は、《複合螺旋運動を主義や学派の違いを超えた基本枠組と考え、＜社会学理論のプロト・モデル＞と位置づけた》(291)のである。

この複合螺旋運動のモデルは、社会システムの全体像を与える試みのひとつとして、うなずけるものだ。既存の理論が狭隘な視野ゆえに見落としてきた部分（機能主義ならば「意味」、意味学派ならば「制度」）が、そこにはみんな含まれ、関連づけられている。自省的機能主義はその螺旋のうえで、構造／機能／意味、の三つの説明概念を配置する。

複合螺旋運動のモデルは、しかし、理論そのものではない。理論のたかだか《プロト・モデル》なのである。たいへんに意地の悪い言い方をすれば、それは、中味を欠いた「絵に描いた餅」でしかない。

「中味がない」のは、まだ着手されたばかりだからか？ この《プロト・モデル》を、自省的機能主義の社会理論にむけ、どのように肉付けできるかが、当面の関心の的である。意地悪ついでにもうひとつ、疑問を呈してみよう。自己組織システムを形式論理によって捉え、客観的なモデルに仕上げることはできない、と著者は洞察していた（自己言及のパラドクス）。そのため、機能要件の実態も、また、社会システムの変容の源泉も、社会を生きる個々人の創意という、形式化しがたいもののなかに捜されることになる。システムから主体へ、そして主体からシステムへのキャッチ・ボール（螺旋のねじれ）。自省作用の所在をそこに指摘することはよいとして、それにこれ以上形式化（理論化）をほどこす余地が、どこにあるのだろうか？

著者のいう複合螺旋運動が、結局いつまでも理論のプロトタイプにとどまるしかないなら、この全プロセスを包摂する理論は、成立しないことになりそうである。それは、螺旋の各局面を扱う部分的な理論の寄せ集め以上でない。これは、社会理論の現状ではないか。この理解が正しければ、著者の貢献は、現状の方法論的モザイクに、聖別と是認を与えたところにこそあろう。それにひきかえ、自省的機能主義の理論のほうは、機能的説明のロジックを持ってそうにない。それは、矛盾を逃れた代わりに、虚弱なメソッドになってしまった。これでは、自己組織現象の扱いはほとんどお手あげ、と言うに等しいのである。

問題をさらにつめれば、社会システムの本質を「自己組織性」に求めるのが妥当かどうかという、いっそう基本的な論点に行きつく。自省作用は、システムではなく、メンバー個々人のレベルで生じる。そこで複合螺旋が導かれた。この螺旋の屈折がどのように生ずるか、まったく解明の糸口がない。

こうした疑念が「意地悪」なのは、現在、著者以上に歩を進めた者がいるわけではないからだ。誰にもできないことを、著者だけに求めるのはフェアでない。だからむしろ、以上の疑念によっても、本書の刺戟的な価値は少しも損なわれはしない。

われわれの前には相変わらず、大きな困難が立ちだかっている。けれども、霧は晴れてきた。果敢で柔軟な理論的努力が求められるとき、いわれない固定観念は最大の敵である。著者は、大胆に固定観念の殻を脱ぎすて、機能主義を再定義することで、これまでの停滞を一掃した。本書は、70年代以来のミニ・パラダイム棲みわけに終止符をうち、各学派の和解と共同戦線の形成をうながした書物として、永く記憶されるであろう。

文献

橋爪大三郎・志田基与師・恒松直幸 1984 「危機に立つ構造—機能理論——わが国における展開とその問題点——」『社会学評論』35-1(137):2-18.